開催結果概要

まちづくりシンポジウム <u>〜まちづくりが照らす未来</u>の可能性〜

日時 令和4年 11 月 27 日(日) 13:30~16:30 会場 阿南市役所1階 あなんフォーラム

プログラム

- ■開会
- ■あいさつ 表原 立磨 阿南市長
- ■基調講演「公民連携によるまちづくり」 株式会社オープン・エー 代表取締役 馬場 正尊 氏
- ■基調講演「本×まちの可能性」 株式会社ひらく 代表取締役社長 染谷 拓郎 氏
- ■トークセッション
 - 登壇者:馬場 正尊 氏 × 染谷 拓郎 氏 × 表原 立磨 阿南市長
- ■開会
- (※ 記事内の事例画像は講演スライドより抜粋しております。)

基調講演「公民連携によるまちづくり」

■講師: 馬場 正尊 氏

株式会社オープン・エー代表取締役/建築家/東北芸術工科大学教授 1968 年 佐賀県生まれ。博報堂、雑誌『A』編集長を経て、2003 年に(株)OpenAを設立。同時期に「東京R不動産」を始める。建築設計・リノベーション(建築の再生)を専門とする。2015年より公共空間のマッチング事業『公共R不動産』立ち上げ。2017年より沼津市都市公園内の宿泊施設『INN THE PARK』を運営。近著に『民間



主導・行政支援の公民連携の教科書』(学芸出版,2019,共著)、『テンポラリーアーキテクチャー:仮設建築と社会実験』(学芸出版,2020,共著)など

公民連携とは

・公民連携とは行政と市民、そして企業が一緒になってまちづくりをする。今までのまちづくりは行政主導が多かったが、それを市民と企業が一緒になってやっていくことが新しい時代のまちづくりだと思っている。



阿南駅周辺の特徴と可能性

- ・阿南市の駅前は、ほかの自治体と比べて公 共の空き空間や公園の空間が多い。それは すごいチャンスで、あまり使われていない 芝生公園のような空間を変えれば、すごく 居心地のいい駅前になるのではないか。
- ・市民会館跡地という駅のすぐ近くに大きい オープンスペースがあるのはすごいポテン シャルで、どう化けていくかがこれからの 阿南市にとって大きい。
- ・土手を登ると水辺の風景が広がっている。 まちのすぐ近くにきれいな川があるのは珍 しく、自転車やランニングで走るとすごく気 持ちよさそうな場所もある。まちとこの水 辺が繋がっていないのはもったいないよう に感じた。

公共空間の活用事例

■ ブライアントパーク(ニューヨーク)

・公園でカフェや映画、読書など様々なことを楽しんでいる。

企業も協賛をして無線 LAN を提供するな

- ど、企業を含めた地域に愛される公園となっている。
- ・場所を貸したり、イベントを行ったりすることで公園自体が収入を得ており、魅力的な 公園はコストではなく、収入源にすらなる。
- ・行政ではなく、民間が公園を経営している。 そのような、公園に民間が関わって経営し 盛り上げたりする時代が日本にきてもいい と思う。
- ・運営企業は、公園の価値を上げることで周りの土地の値段を上げることをミッションとしている。そのような経済効果もみられる公園を見て、日本に導入していきたいと思った。



■ 南池袋公園(豊島区)

- ・南池袋公園は地元に好まれる公園ではなかったが、芝生と緑の豊かな公園になり、カフェと繋がる活気のある公園となった。 民間の会社がマルシェを誘致するなど、公園の運営を行っており、人がいなかった公園が市民の憩いの場に変化した。
- ・豊島区は公園を魅力的にして、複数ある公園を繋いで公園都市としてブランディング していく都市計画を作っている。
- ・阿南駅前も複数の公園を使ってネットワークするとすごくいいエリアが出来上がるのではないか。
- ・今ある何も使われていないような公園や行

政が所有している空き地は大化けする可能性がある。阿南駅前に今決定的に欠けていると思うのは緑。緑があって木陰に座るのが気持ちいい。メンテナンスの面で難しいかもしれないが、緑をしっかり育てることによって豊かな風景が生まれてくる。



■ みんなの公園(佐賀県)

- ・空き地だった行政の所有地にカフェと交流 施設、みんなの公園と呼ぶ空き地を作り、 いろんな人が集まれる公園とした。
- ・ワークショップでは「何が欲しいか」ではなく「何をしたいか」を目的とした。何かをやりたい人が集まり、できること、できないことを説明してできた公園である。
- ・砂利の空き地が緑とデザインと運営する空間を作って再生し、大勢の人が利用している。



■ 仙台市役所(宮城県)

・使われていない空き地を実験場にして、木 造の仮設建築でカフェや本屋などを作り、 実証を行ってみたところ、人気の場所とな った。

- ・マルシェやトライアルサウンディングを社会 実験として実施することで、場所の可能性 が高まっていく。
- ・仙台市役所の建替では、市役所低層部と公園・図書館の一体的なマネジメントを民間 に任せるような方向に進んでいる。



■ トライアルパーク(静岡県)

- ・廃校になった公立学校の前の土砂捨て場である空き地に、土砂の捨て方をデザインして芝生の山を作り緑の公園にした。実験的に様々な使い方を考えられる公園ということでトライアルパークとなった。
- ・緑の空間と小さな建物を作り実験すること で、この場所に可能性を生み出している。



■ アールリエット高円寺(杉並区)

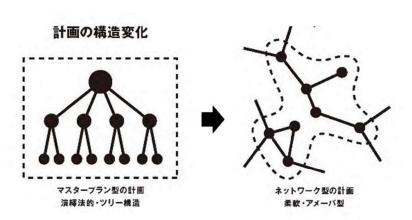
・入居者が減少した JR の社宅の一階部分を カフェなどの店とし、駐車場を公園にした 集合住宅にしたところ、敷地内に公園があ ることで安心して子どもを遊ばせることが できて、一階部分に誘致した店も大人気に なった。 ・女性がイベントを企画したり、人を繋げたり してマネジメントをしている。マネジメント はボランティアだと続かない。経済合理性 が必要で、楽しくもあるが、仕事として責任 をもってやれるからマネジメントとなって いる。

マネジメントの重要性

- ・日本はものを建てたあとに使い方を考える というのが大きかったが、マネジメントが先 で、デザインが後という順番の時代になっ てきている。
- ・阿南市が今から駅前をデザインするときには、まず何かをやってみて、やりながらデザインしていくというプログラムを組んだ方が使われない空間を作らない。
- ・マネジメント組織が行政まかせにせずに自立していくことが大切。また、小企業だと不安がられ、大企業だと自由に活発なことはできない。一緒にチームを組んでやることで自律的なマネジメントができる。
- ・今までのまちづくりはまちのハードウェア ばかり用意していたが、それと同時にマネ ジメント組織を作っていくことが重要であ る。

阿南駅周辺のまちづくり

- ・阿南駅周辺には、魅力的な公共空間や道路、河川敷、民間のお店等がある。点はあるからそれを繋げばいい感じになるのではないかと直感的に感じた。
- ・一気にやる大きな投資よりも小さな投資が 大事と思う。点である民と公の投資が変化 し繋がり面となり、それがまちを作る。
- ・点がそれぞれ面白いことを仕掛け、行政も加わり、それがアメーバのように広がっていって面となることをエリアリノベーションと呼んでいる。
- ・まちづくりの次の概念として、点の集積が 繋がり面になって町の風景が徐々に変わっ ていく。そして、その小さな点に市民がいろ んな形で関わっていく。そういう新しい段 階的なまちづくりの方法論をイメージして いる。
- ・市民の方には楽しみながらまちづくりに参 加してもらいたい。



基調講演「本×まちの可能性」

■講師: 染谷 拓郎 氏

株式会社ひらく代表取締役社長/プランニングディレクター 1987 年 茨城県生まれ。生活者起点で場を作り豊かな時間を提供することを軸に、事業開発・サービス設計・企画プロデュースを行う。 吉野川市立鴨島図書館アートディレクション・企画棚の選書、ブックホテル「箱根本箱」プロジェクトマネジメント、旅館内書店



「Books&Tea 三服」プロデュース、図書館イベントパッケージ「Library Book Circus」 企画・運営などを手がける。

本の現在の価値

- ・パソコンやスマートフォンが普及するなかで、本は自分で読むという能動的なメディアであり、コミュニケーションツールとしても利用できる。
- ・本は、多面体で色々な見方ができる。一つ の価値ではなく、いろんな価値がある。価 値を転用させることができ、色々な使い方 ができるというのが本の面白さである。

本×まちの可能性 事例紹介

■ 箱根本箱(神奈川県)

- ・企業の保養所だった場所をリノベーション して、本屋とホテルが混ざった「ブックホテル」を作った。
- ・18部屋の客室があり、本を一万二千冊置 いている。客室にも本があり、部屋ごとに 置いてある本が異なる。
- ・本の場所を作るうえで大事にしていること は、そこでしか楽しめないものを作ること。
- ・テレビや時計を置かずたくさんの本がある ことで、スマホやテレビを見るといった手ご わい習慣を変え、本をゆったりと楽しめる 空間となっている。

箱根本箱 2018年



■ 文喫(東京都)

- ・本屋であるが美術館や博物館と同じように 入場料を取っている。入場料を取ることが いい時間を過ごしたいというスイッチにな り、ゆっくり本を選び、カフェを楽しんでも らうことができる。六本木という場所のな かで、本を配した空間価値のある場所を提 供している。
- ・入場料制やカフェと併設というように本屋 のビジネスモデルも変化してきている

文喫 六本木 2018年



■ おひさまテラス(千葉県)

・図書館ではなく多世代交流施設という位置 づけであり、カフェやレストラン、ダンススタ ジオ、クラフトルームなどが入っている。そ れぞれのエリアの前にはテーマに合わせた 本が置いてあり、施設の真ん中に本を配置 することで各エリアと連動している。

おひさまテラス 2022年



■ Library Book Circus

・図書館をサーカスに、一冊一冊の本を曲芸師に見立てて例えている。トークイベントや選書した本の展示などを行い、静かな場所からの脱却としてお祭りをしている。

■ 前橋ブックフェス(群馬県)

- ・令和4年10月に開催されたお祭りで、商店街にボランティアで送られてきた本が三万冊程並んでおり、参加費を払うと自由に持って行っていいシステムになっている。
- ・送料自己負担でも全国から本が集まり、2 00人以上のボランティアが全国から集ま る。閑散とした商店街に5万人の人流がで きたことは、まだまだ本×まちの可能性が あると感じた。

■ まちライブラリー

・全国で増えており、私設の図書室的な場所 を作り、本を持ち寄って配置することで、本 が自己紹介のツールとなり、人と人の繋が

- る機会ができる仕組みになっている。
- ・本に対する許容度や親しみ度は非常に高く、 まちなかに交流を作るためのツールとして まだ本の可能性はある。



阿南市で実現する本×まちの可能性

- ・本は多面体で、同じ本でも全然違う使い方ができるというのが本の価値であるため、 実現したいことを決め、それに対して本が どのようにアプローチするかが大切と考える。
- ・本がある場所を作るとなると、一面的になってしまう。作りたいものやしたいことが組み合わさって土台となり、それに本が作用するような文化複合施設になればいい。
- ・文化複合施設は、偶発性と目的性からなると考えている。本というのは色んな種類があり、求めていったところではないところに本当に自分の求めていたものがあるという偶発性もある。また、探していたものを検索する、買いに来るという目的性もある。仲介者が重要で好奇心の種を植えてそれを育てる。自分が何に面白がっているのかを気付くことと、それをサイクルとして育てていくということは全然違う行為である。何に面白がっているのかということと、その面白がっているのかということと、その面白がっていることがちゃんと自分の身に付くか、この「出会うこと」と「育てること」をきちんと実現できる仕組みを入れたい。

大規模なものではなく、地域に寄り添った 文化複合施設がまちに今後増えていってほ しいと思う。

トークセッション

■登壇者

馬場 正尊 氏 染谷 拓郎 氏 表原 立磨 阿南市長



まちの「にぎわい」「活性化」とは

馬場氏

次の時代の理想とするまちの風景のイメージの姿が変わっていると思う。密に人がいて、ざわざわにぎわって活性化している風景というより、穏やかな風景が広がっているのが、次のまちの幸せな風景の姿じゃないかなとよく思う。

地方都市は人口が減るのは間違いない し、穏やかに持続可能で幸せな風景が広 がっていることを目指すのが現実的。い いまちの風景のイメージは、たくさんの人 の流れや建物の並びよりも、もっと穏やか な風景であると思う。

染谷氏

にぎわいとか活性化というのは、自治体や仕掛ける側の目線であって、まち側の人に置き換えると、穏やかなまちのイメージでも、その人の心の中はにぎわっていたり、自分の感情が活性化するということであれば、それはにぎわっていると言えると思う。

阿南駅周辺を歩いた ファーストインプレッションは

馬場氏

まず空き地が多く、緑が少ない、道路の 走り方が複雑であり、いろんな形でいろん な敷地があると思ったと同時に、川が美し かった。いい感じの空いた公共空間が集 中していて、いい感じに変化できそうなツ ボがあり、それらをうまくつなげるといい のではという可能性を感じた。

染谷氏

道路が少しくねっている印象があり、パッと見渡せるというよりも、まちを歩いていくと、どんどんと風景が変わるというのが非常に印象的だった。すぐにきれいな川沿いに出られて、歩いて行ける距離にいろいろある。きちんとした場所を作れば、人もそこへ集まってくれるのではないかという印象がある。

コミュニティを醸成する 居場所について

馬場氏

タダでいいから居てもいい居場所が、 現代都市はどんどん少なくなっている。特 に高校生、中学生と高齢者の方の居場所 がない。特に若い世代は、まちで思い出が あると、将来そのまちに帰ってくる。だか ら思い出がある場所をしっかり作ってお くことがとても重要で、居心地が良くて美 しく楽しいところがいい。そういう意味で、 図書館も本があって勉強するところとい う捉え方だけでなく、なんとなくいてもい い居場所くらいに捉えた方が長い目で見 たときにまちの価値になると思う。

図書館における公民連携を考える上で、欠かせない要素は

染谷氏

図書館の運営方法がいろいろある中で、スターバックス併設型のような図書館は、どこでやるにしてもある程度クオリティが担保できるという意味では魅力的だが、その良し悪しは、それぞれのまちの人の価値観による。地元の方や企業が、出店、運営した方がいい場合が絶対にあると思っているので、どちらがいいかフラットに判断して導入するべきで、ハイブリッド型というのもある。複合施設の場合、行く人側からすると誰が運営しているかはあまり関係なくて、魅力的な場所になっていればいい。内側で、行政と民間を繋ぐ人がいないといけないと思う。

表原市長

市民からの要望の中の一つとして、駅

西側に居心地のいいカフェが欲しいとい う声が最近寄せられるようになった。

馬場氏

南池袋公園の計画には、公募に世界的 企業が手をあげたが、豊島区がプロポー ザルで選んだのは、地元愛と地域のため にカフェをやるという地元の企業だった。 地域の企業だったから一緒にやれている と本当に思う。いきなり外資やナチュラル チェーンを連れてくるよりも、地域の若者 を信じて任せて一緒に盛り上げていく方 が、地域の中でもお金が回るし、人材も育 つ。

染谷氏

人がその場所に来ると、外から中の矢 印だけではなく、図書館から何か別の所 に働きかける。そこはまちのことをよく知 る人じゃないと案内できない。エリアリノ ベーションの点と点が面になっていく必須 条件としては、やはりまちのことを知って いる人や、人と人を繋げられる人。そこで 全部解決できなくてもいろいろ揃ってい て最終的には解決できる、そういうやり方 となると地域のことをよく知っている事 業者じゃないとなかなかそれを叶えられ ないと思う。

表原市長

点と点から線に、線から面にと展開する、 人を介在して繋がっていくというのは可 能だと思っているが、大事なことは、そう いうプレイヤーが実はいるにも関わらず、 初めからいないと思っている先入観に問 題があるのではないか。

馬場氏

本当にそう思う。能力は期待されないと発揮できない。だから一回期待しない

といけないと思う。人口 7 万人のまちで 教育水準も高くて、いないわけがないと 思う。ただどこでその能力を発揮したらい いかわからない。そういう人たちが活躍で きるフィールドをいかに作るのかという のが僕らの役割だと思う。

染谷氏

いきなり場所を作ってそういう人たちが能力を発揮できるかというと難しい。でも現場を経験して一緒に取り組んでいると、半年、一年と経つにつれて、働き方が変わる瞬間があった。今いないと思っていても、その場を経験していけば、どんどん化けていくということがあると思う。

馬場氏

場所やまちが人 を育てる。そうする と、育った人はその 場所、そのまちに愛 着が沸くので、また 他者を連れてきた り次の人材を育て



たりする。その循環を途切れさせないよう にすることがとても大事かもしれない。

阿南駅周辺まちづくりビジョンの中の 案として示されている集合住宅につい て、将来的に必要とされる機能となり 得るのか

馬場氏

僕は中高生時代を佐賀市で送っていて、 そのまちの風景に対して思い出や記憶が ある。商店街の空洞化が始まったときに 政策として再開発することになって、そこ を壊して上に集合住宅、下に商業という いわゆる典型的な再開発モデルが行われ た。

まず中高生の時の思い出の風景が失われることのインパクトがショックだったというのが一つ。もう一つは、段階的な計画がなく、大きく投資しているものなので、上の住宅はすぐ売れるが、下の貸さなければいけない商業域が全く埋まっていかなかった。しかも、周りの商業が政策によって吸い上げられてしまうと、街角のいい感じのものがビルの中に入って組織的になって、潰れていく。結果、商業のところがガラガラになり、数十億のお金でまちづくり会社が破綻。それを市が補填し続けることになる。

一回失われた風景は二度と戻ってこない。本当にまちのためには何が正しいのか。20~30 年先に自分たちの子供や今思い出を作っている高校生達のためにはどうしたらいいかを決定する立場にある人は冷静に考えないとすごい負債を残すことになる。特に地方においては、小さい船で状況にしっかり合わせた舵をきっていくような都市計画をしないと痛い目をみると思う。しっかり慎重に考え、理想の風景をみんなで想像して、現実的な目で考えることが大切な時代が来ていると思う。

表原市長

建物は一度オーバースペックで立派なものを作るとそれを壊すことも縮めることもなかなかできない。20~30年後、世の中が変化した時に、果たして箱の必要性をどう考えるのかということも非常に大事だと考える。

染谷氏

大きく作ると変化に対応できないのは、その通りだと思う。本の良さは並べることによって表情を変えることができる。例えば、今ここに



100冊本を置いたとして、秋の本100冊置くのと、まちづくりの本を100冊置くのでは全く風景が変わる。そして100冊本を購入するのはおそらく10万円もかからない。だから実験してみるとか、仮想で場所を作ってみるときに図書の可能性は結構あると思う。

馬場氏

本は、確かに場所を作るツールでもあり世界観を作るツール。例えば焚火のような、本があると寄ってきたくなるような独特の魔力がある。

暫定的な緑地からの段階的な開発 について

表原市長

阿南図書館の場所は暫定的に緑地化するという案もある。一気に開発を完結してしまうのではなくて、段階的に行う。例えば、真ん中の市民会館の跡地に複合施設が来たと仮定して、そこでの市場の変化や人の反応を市民満足度とか地価の変動等で見ながら、次の開発のフェーズで民間投資を呼び込んだり、自ら投資を行ったりという段階的な投資をしていくという形である。

馬場氏

まさにトライアルパークに似ている。暫

定的な緑地を作ってそこで実験すると同時にエリアの価値を上げることが出来るかもしれない。

もう一つ、そこで人材を育てられる可能性がある。大きい建物ではなく、ライトな建物を建てて、緑地にして木を植えたりして心地のいい空間を、大きな投資ではなくてライトな投資でとりあえずやってみて様子を見る。

表原市長

ミニマムな投資から入って、まずは様子を見る。もしそれでダメだったとしても、まだ撤退や軌道修正ができる。トライアルパークという名前もいいが、例えば「トライアンドエラーパーク」みたいな名前も、エラーは単にマイナスではないという前向きなメッセージも含めていいのでは。

染谷氏

暫定的に利用する、空き地ではなく広場であることが重要だと思う。仮に複合施設が真ん中に来たとして、歩いてすぐ広場的な空間があると、そっちでコーヒーを買って広場に移動するといった連動もしやすいし、ダウンサイジングの考え方をしたときに、トライアンドエラー出来る場所は非常に有用だと思う。モバイル図書館の車もあったが、キッチンカー的なそういう変容ができるようなモビリティを導入することも検討できそうだと思った。

表原市長

建造物だとコストがかかるし、根を張ると動かせない。でも車ならいろんな車両が入れ替わってそこで商品やサービスを将来的に変更できるかもしれないし、売れなくなったら別の場所に移動するなどいろいろ考えられて、売り手にとっても買い

手にとってもいいことずくめだと思っている。変容性が大事だと思う。

馬場氏

例えば建物だけではなくて改造したキッチンカー、改造したショップのようなものを行政が所有して、それをチャレンジしたい人に賃貸する。うまくいったら空き物件で起業するという風にチャレンジの機会を与えるのはあると思う。

表原市長

今後、施設の老朽 化や高齢化のような 変化の中でも一人ひ とりの満足度のよう なものを維持してい くような要素をまち づくりの中にも落と



し込んでいきたいと2人の話を聞いて思った。

人や自転車などの回遊性を高めるには

表原市長

阿南のまちは碁盤の目のようなわかり やすい道路区画ではないし、駐車場もい ろんなかたちであちこちに点在している。 道も木陰、日陰がない、歩道も少ないとい う中で、富岡東高校の西側の道路拡幅を 行っている。ここの介入性を高めていくた めに、これから段階的に進めてなければな らないことは何か。

馬場氏

新しい都市の構造をつくるときには、楽 しく歩き回れるループ導線が大切になる。 そのループ導線に公共施設、駐車場、駅な どがあると駐車場に止めて、歩いていろ んなものを巡回しながらまた戻ってくる。 いろんな地域でトライしているが、この阿 南も、ループが変形して二重になるかもし れないし、小さな大きなループになるかも しれないけれど、歩いて楽しい緑の気持ち いいルートみたいなものが、都市計画でで きる気がする。

そのようなデザインをするときのポイントとして、緑や木陰、居心地がいい場所やちょっと腰掛ける場所があるといい。それから張り付いている施設がまちにストリートに開けているといい。道と建物だけではなく、道と建物の間に縁側みたいな中間的な領域があること。それからバリアフリーになっている。そのあたりのポイントを外すとダメだと思う。

表原市長

公と民の境界線、民と民の境界線、道路と建物の境界線、この境界線を溶かしていくということ。建物から芝生、道路というように市役所をまちに開いていくと考えたときに、あまり境界線を作らない、既存の境界線を壊していくという考え方もあるのではないか。

馬場氏

床の素材は大事。芝生の横に歩けてバギーも乗せられるような場所は必要。バリアフリーに関しては視覚障害者の点字ブロックの位置が重要。地面のデザインで、居場所が作れたり、導線が作れたりするから、境界線を壊したり、緩やかな境界を作ることは小さいようで大きい。

表原市長

道路のカラー舗装は大事だと思う。芝生があったとしても緑からアスファルトの 色になったときに、そこが完全に境界線に なると思っていて、カラー舗装を、例えば ベージュ系や茶色、土色に近い暖色系の カラー舗装にすると、公共空間から中間 領域や道路となったときに境界線が溶け ていくという気がする。

馬場氏

阿南市にはぜひデザイナーと一緒にストリートのデザイン自体もしてほしい。昔は、車中心で車のスケールと速度のためのデザインなのでざっくり大きい。今は完全にヒューマンスケールのデザインなので、道路にもヒューマンスケールのデザインを持ち込む時代になってきている。そこは次の都市のデザインの大きなポイントだと思う。

表原市長

初期投資もかかるし、管理コストもかかるし、地方都市にとってはすごくハードルが高いものなので、いきなりフルスペックでやろうとすると、尺取虫のようになって、ループ化するまでに 20 年かかる計画に50 年以上かかるかもしれない。

馬場氏

そういう意味では時間もデザインしなければいけないと思う。行政が緑を作ると、市民は行政が管理をしてくれると思うが、植物も公民連携で管理する方法を一緒に考えていくというプロセスを共有すると、関わった人が引き継いでくれるかもしれないから、その仕組み自体もデザインするときに考える。

表原市長

運営を考えてから設計するというプロセスを歩む必要がこれからのまちづくりにおいては非常に大事と思っている。海外では当たり前だが、日本ではどちらか

というと逆なので、ここをスイッチしていかないと持続性という意味においては担保できない気がする。

馬場氏

木が枯れると市民が行政に連絡するように、公共物のはずだけれども、公共空間が行政空間になっていた。昔は自分の家の周りを自分で掃除していたのが、あまりに社会が組織的になりすぎて、行政と民間がはっきり分かれてしまった。それを溶かすための官民連携だと思う。家の目の前の木は自分の木であると思うくらいのメンタリティをゆっくり作っていくような時代だと思う。

エリアマネジメント・エリアリノベー ションを阿南で実現していくための組 織づくりについて

表原市長

阿南市内の各地で行われているトライ アルサウンディングという事業がある。民間のアイディアを試験的に実証して、顧客 の反応を楽しんで、次につなげていく。そ の中で僕は人が育ちつつある、人と人が 繋がりつつあるというところに未来の可 能性を少し感じている。

馬場氏

ナイトマルシェや社会実験、トライアルパークでまず人を顕在化する。まず実験して盛り上がり集まってくる人たちを僕らはプレイヤーと呼んでいるが、まちのプレイヤーをまず発掘して、彼らが活躍するフィールドをいかに作るかだと思う。そこから溢れ出てくる人は絶対いるから、しっかり期待してエリアマネジメント組織を組織的すぎずに作っていくことが重要で、自主的

にやってみたいという人が生まれる環境を作ってあげるのが大切。人材はそういう実践の中でしか生まれてこないと思う。だから図書館を作るというプログラムの中で、そこに張り付いているサービス等に民間の力を入れながら、実験場にすればいい。失敗しても修正すればいいので、恐れずにまずやってみる、やらせてみるっていうことを繰り返しながら補正する。

表原市長

まさにトライアンドエラー。

染谷氏

だれがやるかというところで、まちのプレイヤーを育てていくということもそうだと思うし、誰に来てもらいたいかということも、トライアンドエラーがあるのではないかと思った。

会場に来てくださった皆様に応援の メッセージ、アドバイスを

馬場氏

まちの当事者になるといいと思う。プレ

ーヤーも当事者なので、こうしなければならないというより、いかにプロセスを楽しめる当事者になれるかがポイントだと思う。見守る市民は寛容性を持って彼らの動きを見守り応援していくことが大切だと思う。それぞれの立場があると思うが、プロセス自体を楽しめるようなプロジェクトだといいと思う。

染谷氏

本というツールは、何かを実装してみる 時や社会実験してみる時に結構使いやす いツールなので、ぜひ使っていただけたら と思う。このプロジェクトが将来的に振り 返って、プロセスやまちの人の声、行政側 の声も含めて1冊の本ができたら最高だ なと思った。

表原市長

これから作っていく新しい場所が、それぞれにとっての新しい時代における新しい物語づくりに繋がっていけることが大切である。しっかりとリーダーシップを発揮しながら強い気持ちでやっていきたい。

